

輪廻転生 —ブナの終焉と誕生—

計画課 生態系保全係長 有本 実

2015年5月号から隔月で連載してきました生物関係のミニコラムですが、42回目の今回をもちまして最終回となりました。最後は“東北地方の森林生態系をたった一枚の写真で表現するなら”という観点から厳選した画像で締めくくります。

2018年9月4日に日本に上陸した台風21号の猛威により、白神山地のシンボルだった津軽峠のマザーツリーが折れたほか、多くのブナの巨木にも被害が及びました。下の写真はそんなブナのうちの一本で、同年10月21日に白神山地で撮影したものです。

大きなブナが一本倒れると上空が開けて日射しが林床に降り注ぎ、植物の発芽や生長を促します。これまでブナの枝葉に遮られていた日光を求めて、沢山の草本類や灌木類が我先にと生長するのです。開けた上空に新たな高木が伸長するまでの期間は、ノウサギの良い餌場になるでしょうし、藪に営巣するウグイスやヤブサメなど小鳥達の生息空間にもなるでしょう。それらを狩りにクマタカやテンなどの捕食者

もやってくるかもしれません。

倒れたブナはナメコやブナシメジ、ブナハリタケなどのキノコ類に分解され、菌類を餌にするキノコムシ類や朽木を餌にするカミキリムシ類など沢山の昆虫類が集まります。もしかしたら朽木内にムネアカオオアリが営巣し、クマゲラの採餌場所になるかもしれません。運良くブナの倒木上にブナの実が落ちれば、朽ちたブナを栄養にして大きく生長することでしょう。

私の目の前に横たわっていたブナの巨木は、生前はもちろん、命果てた後も多種多様な動植物を育み、それらの動植物がまた別の生きものに利用され、分解され、命のリレーは永遠に続きます。『マザーツリー（母なる樹）』という言葉の意味は、その巨木が倒れた後にこそ理解が深まる気がします。一本のブナの終焉は、新たな生命の循環の始まりでもあるのです。

本連載で、東北地方の野生生物にほんの僅かでも興味を持っていただけたなら、筆者にとっては望外の喜びです。長年のご愛読ありがとうございました。



一本のブナの巨木が折れて大きく開いた林冠。ここから新たな生命の循環が始まります。

